

## 「悪魔の策略を超えて」

エペソ人への手紙 6 : 10 - 13

February.1.2026

### エペソ人への手紙 6 : 10 - 13 (パウロ)

#### Preface

エペソ書に戻りまして、続けて悪霊に対する戦い、悪魔の策略に対して堅く立つことについて考えていきたいと思えます。

悪魔の策略に対して堅く立つと言った時、私たちが覚えておかなければならないことがあると、聖書は教えます。

それは、悪というものは、私たち人間の中から出てくる考えや思い程度のものではないということです。

「私という人の中から悪い考えや悪い思いが出て来る以前に、「その悪なる考えや思いを刺激し、衝動的に悪を行うように導こうとする主管者がいることを知らなければならない」と教えます。

この世においてある意味、水戸黄門の印籠のようにそれを目の前に差し出されるとうんとすんとも言えずに、ただ「ハハーッ」とその前にひれ伏すかのように絶対的权威のようなものを付与されているようにも見えなくもない「科学」という世界観からしますと、「悪とは、完全の欠如だ」と言います。

物事が一層優れたものに発展するという所謂世に言う進化論的見地から見た時、「人間は、まだ完全な次元に到達することが出来ておらず完全な状態に至ることが出来ていないために、悪と言えるようなことが起こり、腐敗したことが起こる」というわけです。

でも聖書は、「私たちの戦い格闘は、悪や悪人との戦いではなく、悪を主導しているこの暗闇の世界の支配者たちとの格闘だ」と、「神を知るとして最も大切な根幹的な知性において暗くする者たちとの格闘だ」と言います。

### エペソ人への手紙 6 : 12 (パウロ)

私たちが食い尽くし倒そうとする者たち、イエス様が弟子のペテロに「シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願っていますが、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくなるように祈りました」と仰ったサタンという悪の主管者が勢力をもって私たち人間を握りしめて、揺さぶり、支配して、振り回そうと全神経を集中させていることを聖書は教えて下さいます。

なのに意外にも、クリスチャンたちが、こういった悪魔の話あまりしたがらないようにも感じます。

#### Part One

例えば、他の方にイエス様のことを伝えようとする時皆さんは、罪と裁きについて話したいと思われるのでしょうか、それとも、愛と祝福についてお話ししたいと思われるのでしょうか？

皆さんが、初めてイエス様の話を聞いた時、罪と裁き、または愛と祝福どちらの方が先だったのでしょうか？

罪と裁き、愛と祝福、キリスト教をどなたかに伝えたいと思った時、私たちはどちらをもって紹介したいのでしょうか？

もちろん、どちらでも構いません。

罪と裁きについて先にお話しても、愛と祝福について先にお話しても、方法的にはどちらでも構わないと思います。

ただその内容について考えてみますと、「今日日本におけるキリスト教は、愛と祝福一辺倒にはなっていないだろうか」というような憂慮の思いが湧いてきます。

また、「それが片寄り過ぎると、却って危険なことになるかもしれないな」とも思います。

なぜなら、事実として、実際的なものとしてキリスト教信仰を紹介するよりも、人を慰め、人の気持ちや人の心に合うように合わせていくことをもって、キリスト教を説明しようとするようになってしまうかもしれないからです。

キリスト教信仰を、人の作った世の宗教や神観とそれほど変わらない、自分たちの好みに従った耳障りのいい作り話にいつの間にかしてしまう恐れがあるからです。

『語りにくいことは語らない、変に思われるようなことは言わない、言ったりやったりしても比較的受け入れられ、世の基準や雰囲気からしても一般常識とされる範囲内に留まるようなところまでは良いけれども、それ以上は言わないし、やらないし、表現しない』と、いつの間にか世の中という風呂敷の中に包み込まれてしまっているかのようなキリスト教にはなっていないだろうか、戦中のキリスト教会、世に取り込まれ丸め込まれたキリスト教信仰のような状態をズルズルと引きずり続けてはいないだろうか」と思わされることがあります。

旧約聖書のエレミヤ書でも指摘されている通り、「身分の低い者から高いものまで、みな目の前の利得をむさぼりむさぼろうとするだけで、民の傷をいがかげんに癒しながら、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている」ような、主イエス様の説く緊迫感を失ったような状態にあるのではないだろうかというある種の緊張感を覚えることがあります。

私たちが、キリスト教に、聖書の教えに合わせなければならないのでしょうか、それとも、キリスト教が、聖書の教えが、私たちに合わせなければならないのでしょうか？

どちらが絶対的なのでしょうか？

聖書の教えが、キリスト教が、キリストの教えが絶対的です。

ゆえに、愛や祝福を先に、またはそればかりを言及することは、まかり間違うと私たちの必要にキリスト教を合わせ、私たちの納得の範囲内にそれを収めようとする危険性があるように思います。

こういった脈絡の中で、悪魔の存在に対する安逸な認識と悪魔の策略や攻撃についてぞんざいに扱うことは、とても危険なことのようです。

なぜならば、悪魔がいるいない、霊的盲目や暗闇に対する戦いではなく、人間同士で打ち合っている同士討ちのような戦いに従事させられていることに気付けなくなってしまうからです。

神を知るといふ人にとって最も大切な知性において私たちを無知にしようとし、キリストの光が私たちを照らすことを妨げようとするサタンがいて、私たちをもって悪を行わせようとする管理者がいるという事実に対して、私たち人間に、他の概念の他の種類の戦いをさせている悪魔の策略にまんまとハマってしまっていることを認識しようとしなくなってしまうからです。

だから人は、ともすると、「人の敵は人だ」と「敵はあの人だ」と思ってしまい、人との戦いに明け暮れてしまうのでしょう。

最初に罪を犯した最初の人アダムが、自分たちをまんまと罠にはめた蛇に化けたサタンではなく、愛しているはずの妻エバを人類最初の敵と見なしてしまったその姿の中に、私たち人類の姿が良くあらわれています。

本来の敵である悪魔を認識しないことによって、人を敵としてしまう、人と戦うスパイラルから抜け出すことなく、ここまで人類は、歴史を積み重ねてきてしまいました。

滑稽なことに、人との戦いや競争において目立った働きをして来た人、または勝ち抜いた人を英雄に祀り上げることまでして、人を敵とする歩みを正当化して来たかのようにも見えます。

だからイエス様は、何度も口酸っぱく、そして優しく思いやりをもって、本質的なことを語って下さいました。

『あなたの敵を憎め』と言われてきたかもしれないけれども、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。父なる神はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。』

「敵を間違えてはいけませんよ」とイエス様教えて下さいました。

## Part Two

でも実情として、悪魔の存在、悪霊の存在、暗闇の世界の支配者たちが持ち合わせている悪の力が私たち人間に、神の存在と霊的世界の存在について至るすべてのものまで認識しないような結果を生み出させています。

人の作ったモノに満ち溢れ、それを手に入れる戦いに満ち溢れている世界に

において、一時的な目に見えるものではなく永遠に続く目に見えない栄光に富んだものに目を留め、捉え、得ようとする戦いではない戦いのために生きてしまっている。

せつかく与えられた信仰を、血肉の戦い、つまり、自分の好みや価値観に従った自分の耳に心地よい話や思いの実現のためだけに用いようとするただの道具にしてしまっていないだろうかということです。

C.S.ルイスの著書「悪魔の手紙」の中に、悪魔の上司が悪魔の部下に書き送った、人を神を信じないという状態に留めておくためのアドバイスにこんな一文があります。

「何世紀も前からわれわれが彼ら人間の中に仕掛けておいた働きのおかげで、人は見なれたものが目の前にある間は、見なれないものを信ずることはほとんど不可能と思うようになっていく。下手に科学などというものをを用いることはせず、もしどうしても用いたいなら、あなたの担当しているその人を社会学と経済学に引きとめておき、貴重この上ない『実生活』から離れないようにしてやりなさい。物事の通常性を肝に銘ずるよう説き続けなさい。物事に対してそんなこと先刻承知だと思わせ、たまたま聞きかじったり、目に触れたものが全部『近頃の研究の成果』なのだという壮大な一般観念を彼に与え続けることだ。君は彼をばかすためにそこにいることを忘れてはいけない。『教える』のがわれわれ悪魔の仕事だ。」

悪魔は一生懸命に全力を、彼らなりの知恵と知識を尽くして、人を、神を知るということから離れさせておこうとしています。

特に人をどこに留めて置こうとしているのかと言いますと、目に見えるこの世界、貴重この上ない「実生活」の中だけに留めておこうと、この世はハッピーなところ、そのハッピーなところで出来るだけ甘い汁をいっぱい吸ってから天の御国に行く、天の御国に行くのは出来るだけ後の方がよく、この世界のこと頭の中を出来るだけいっぱいにしておくこと、この世界における血肉の戦いにおいて勝者となってから行けばいいところ、目に見えることで、目に見える戦いのことでいつの間にか心をいっぱいにしておこうとします。

ではそこで、私たちに求められることは何でしょうか？

### エペソ人への手紙 6 : 11 - 12 (パウロ)

という事実・現実を思い出し、目を向け、祈ることです。

「目に見えるものがすべてだ」とあらゆることを通して毎日毎日刷り込まれ続け、目に見えるもののみで物事を判断し、区別し、さばき、ランク分けするよう、実のところサタンという存在に仕向けられているということを見抜き、神の前に跪き、祈ることです。

使徒パウロ先生の告白が印象深く思い浮かびます。

第二コリント 4 : 18 - 5 : 2 (パウロ)

ピリピ人への手紙 1 : 20 - 23 (パウロ)

この使徒パウロ先生の「世を去ってキリストとともにいることの方が、はるかに望ましいのです」という告白、教え、真理、事実にあーめん出来るでしょうか。

目に見えるものがすべてであるかのように毎日刷り込まれ続けている現代を生きる私たちクリスチャンは、いつの間にか、「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです」という事実が見えなくなり、受け入れられず、だんだんと霊的視野を弱体化させられているのかもしれないということに緊張感を覚える必要があるでしょう。

イエス様の仰る、「もう既に今という時は、多くの人が惑わされる終わりの時であり、最後まで耐え忍ぶ人は救われるという時なんだ」という御言葉が事実として入ってくる霊的覚醒が求められているのだと思います。

イエス・キリストを信じるということを、社会が唱える常識の範囲内に留めようとし、常識の範囲に留まるどころだけ受け入れ、信じ、現代というバビロンの塔のような世界を作り立て上げた力、根拠、思想、発想、権威、水戸黄門の印籠のようになっていくのようにも見えなくもない所謂科学という見地から見て説明のつくことのみ、受け入れられることのみ、差し支えのないことのみ、また生きる上で生じる様々な問題を解決してもらおうという側面においてのみ、信仰は有益で価値があるんだと、いつの間にか思わされている。

口では「父なる神よ、主イエス様よ」と言いながら永遠のいのちを主張するけれども、毎日を生きていくその方法と原理と考えにおいては、至って世的な尺度で、世的な範囲内に留めている。

つまり、私たちは、祈らないようになってしまったということです。

祈らないということは、結局、私たちの信仰生活という現場において霊的戦いを放棄し、世的な方法をもって、世的な戦いをしているということになるでしょう。

人生という現場を生きていく上で現実的にぶつかる問題を、どう捉えていくのか、どう反応していくのか、どう霊的視野をもって見ていくのかということです。

### Part Three

人生という現場を生きていく上で現実的にぶつかる問題をもってサタンは、私たちを彼らとの戦いではなく、血肉への戦いへと仕向けて行きます。

具体的に言いますと、祈らない、もしくは、祈っても、神の語り掛けるかな細い声に耳を傾けようとしないように仕向けていく。

苦難が来れば、その苦難の原因を作ったと思われる人を憎むように仕向け、病が来れば、与えられた永遠のいのちと神の国を相続するという神の約束を極々小さく感じるようにし、無きものとし、平安を失わせ、このハッピーな世の中でこの世が説くハッピーをもっと味わうために癒して下さらない神に対する恨みつらみが増長するよう仕向け、物が無きや無いなりに不満を募らせ、物が満ち足りれば高慢へと誘い、何としてでも、私たちをこの世の範囲内に留まらせようとしています。

では、なぜ、神様は、そんなサタンを、悪魔を、悪霊たちを未だに活動できるように許しておられるのか？

サタンに苦しめられている中で告白したヨブの言葉に、その答えがあるように思います。

### ヨブ記 23 : 10 (パワポ)

サタンは神のお働きと御業を妨害しようと、ヨブを苦しめ神から遠ざけておこうと全精力を動員させていますが、ヨブは言います。

「しかし神は、私の行く道を知っておられる。私は試されると、金のようになって出て来る。」

サタンはヨブを試み、試し、誘惑しましたが、神様は彼らのその活動を通してまでもヨブを金のように造り上げなさろうとされ、実際にヨブを苦しみにあう前より、はるかに素晴らしい神の人として造り上げなさいました。

ヨブ以外にも、すべての苦しみや試練を通して、ダビデをダビデとし、モーセをモーセとし、ペテロをペテロとされました。

これが、神のなさろうとされることです。

詩篇 119 篇の

### 詩篇 119 : 71-72, 75 (パワポ)

というこの御言葉を私たちは信じられるでしょうか？

信じますか？

神様は、私たちを倒そうと、私たちを苦しめようとされるのではなく、神様が私たちを磨かなければならず、私たちの内にある毒麦を抜いてしまわれるためにこうなさいます。

だから聖書は、「様々な試練にあうときはいつでも、この上ない喜びと思いなさい。信仰が試されると忍耐が生まれ、その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つかけたところのない、成熟した、完全な者となります」(ヤコブの手紙 1 : 2-4) と言います。

さらには、「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いた人は、神を愛する者たちに約束された、いのちの冠を受けるからです。だれでも誘惑されている時、

神に誘惑されていると言っははいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれかを誘惑することはありません。人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです」(ヤコブの手紙1：12-14)と言います。

サタンは私たちの罪を刺激し、その罪をもってぶっ潰そうと攻撃してきますが、主は、そのことをも用いて、私たちを金のようにお造りになっておられるということを私たちは知り、信じる必要があるでしょう。

そうしてこそ、たとえ私が今日試練にあうとしても、それが私にとって益となるということを見出し、さらには、イエス様を信じ抜くということが中々出来ない信仰弱き者であることが分かるようになり、ちょっとでも放っておくと、世を愛し、世に逃げ、神を捨て去ろうとしてしまう罪なる習性が根深くあることを悟ります。

そのようにして私たちは、もっともっと父なる神に、主イエス様に、聖霊様にしがみつくようになり、私が私自身を神様に服従するよう胸を叩いて行かなければならないことを学び、霊的緊張感をもって祈らざるを得なくなります。

そして遂に、

#### コリント人への手紙第二4：17 (パウロ)

という栄光の場に立つ事実を事実として発見するようになるでしょう。

#### Conclusion

だから、悪魔の策略に対して堅く立って下さい。

悪魔の策略に対抗して下さい。

悪魔の策略に負けないで下さい。

人と人との間を何としてでも引き裂こうとしながら、うそ偽りと、かたくなさと頑固さにすがり付くその悪の場に立つよう煽ってくるサタンの策略を、祈りと御言葉をもって見抜いて下さい。

神様が私たちの生活の中でサタンの攻撃を許しておられるのは、私たち自身の中に悪に気付かせるためです。

神の前に確かに罪人であり、サタンによって飼い慣らされている部分があるということを見出し、その部分を自分の力ではどうすることも出来ないことを発見し、ただ神様にすがり、頼み、祈り、しがみ付いてでも切除して頂かなければならない、神によって聖なるものとして頂かなければならないということを、与えられた自由意思をもって認め、認識し、無理矢理強要されてではなく、私自身がその事実を神の前に素直に認めることが出来るようになります。

そして、もうそれ以上、同じところを突かれ、攻撃されても何ともなくなっている恵みによって聖められた、キリスト・イエスにある自分に出会うためです。

正に主の恵みであり、神の祝福の導きです。

だから私たちは、私たちが出会い被るどんなことも、私たちが潰されるためではないということを、主にあつて、主なる神様に感謝出来ます。

試練や苦しみや納得のいかない不条理なことに会い、直面し、苦しめられながら私の心のうちに湧き上がってくる焦りや、無知や、かたくなさや、汚さ汚れを直視し、「私の中には、まだまだこんな悪があるのだなあ」と分かり、告白出来るように導かれたということを感じて感謝出来ます。

涙ながらに感謝しながら、「主よ、またです。私のこの悪をどうか引っこ抜いて下さい。痛いかもしれませんが、その痛みさえもあなたの恵みだと感じられるようにして下さい。後になって、振り返った時、あの時のあの時間は、確かに主が下さった特別な祝福だったと告白出来るように導いて下さい」と祈りながら、私たちのキリスト者としてのその立ち位置を堅く据え、育んでいきたいと思うのです。

神様に、育んで頂きましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ヤコブの手紙 1 : 1 3